

聖霊降臨後第七主日（7月3日の聖書箇所）

I 第一朗読・イザヤ66章10―16節

- 10 エルサレムと共に喜び祝い
彼女のゆえに喜び躍れ
彼女を愛するすべての人よ。
彼女と共に喜び樂しめ
- 11 彼女のために喪に服していたすべての人よ。
彼女の慰めの乳房から飲んで、飽き足り
豊かな乳房に養われ、喜びを得よ。
- 12 主はこう言われる。
見よ、わたしは彼女に向けよう
平和を大河のように
国々の栄えを洪水の流れのように。
あなたたちは乳房に養われ
抱いて運ばれ、膝の上であやされる。
- 13 母がその子を慰めるように
わたしはあなたたちを慰める。
エルサレムであなたたちは慰めを受ける。
- 14 これを見て、あなたたちの心は喜び樂しみ
あなたたちの骨は青草のように育つ。
主の御手は僕たちと共にあり
憤りは敵に臨むことが、こうして示される。

語句の意味

■イザヤ56―66章は第三イザヤと呼ばれ、紀元前6世紀末から紀元前5世紀初頭の預言者の言葉。捕囚からの帰還後、栄光とはほど遠い時代にあつて、その原因を説き、救いの約束を語る。

10節■「彼女を愛するすべての人よ……彼女のために喪に服していたすべての人よ」。第三イザヤが呼びかける相手は、エルサレムを愛しながら、その現状を悲しむ人。しかし、その彼らが喜ぶときが来る。

11節■「飲んで…喜びを得よ」。新共同訳は命令に訳しているが、原文では、目的を表す接続詞レマアン（…するようにと）に導かれており、10節の勧めに従う目的を述べて「慰めの乳房から飲んで…喜びを得るために」の意味。■「豊かな乳房に養われ、喜びを得る」。直訳は「彼女の栄光の豊かさから飲んで悦ぶ」。傍線の名詞は「乳首」の意味かもしれない。そうであれば、「彼女の栄光の乳首から」。

12節■「彼女に向けよう」。平和と諸国の栄えが大河のようにエルサレムに流れ込む。■「乳房に養われ」。原文では「乳を飲む」。

13節■「母がその子を慰めるように…」。直訳は「母がその子供を慰めるその子のように、そのようにあなたたちを私は慰める」。比較されているのは慰められる対象。そこで、神が女性にたとえられる、きわめて珍しい箇所になる。

14節■「骨は青草のように育つ」。直訳は「あなたがたの骨が青草のように芽吹く」。骨は体を支える支柱。それが雨の後に若草のように元氣を取り戻す。名詞「青草（デシエン）」は「若草」の意味。■「示される」。動詞ヤーダー（知る）の受動形で、「知られるようになる」の意味から「顕になる・示される」。

①今日の朗読の最初には「…彼女と共に喜び樂しめ…」（10節）とあり、結びにも「これを見て、あなたたちの心は喜び樂しめ…」（14節）とあるから、「喜び樂しむ」が全体をくくる言葉になっている。この動詞シースは、②の「言葉の広がり」にあるように、「神が民を喜ぶ」とか「民が神の業を喜ぶ」という用例の多い言葉であり、神と民とに見られる喜ばしい関わりを表す。まず、10節だが、この節を直訳すると、次のようになる。

喜び祝え エルサレムと共に

そして喜び躍れ 彼女の中で

彼女を愛する者たちすべてよ

喜び樂しめ 彼女と共に 喜び樂しみを

彼女のために悲しむ者たちすべてよ

第三イザヤが「喜び樂しめ」と呼びかけている相手は、「彼女を愛する者たち」であり、「彼女のために悲しむ（喪に服す）人たち」である。彼女とはエルサレムのことだから、愛するエルサレムのために今は悲しんで（喪に服して）いる人たちへの呼びかけである。

第三イザヤが活動した時代は、捕囚地バビロンから帰還し、神殿も再建されたのに、約束された栄光が見えなかった時代である。ペルシヤの支配は相変わらず盤石で、恒常的ともいえる飢饉が解消したのでもない。かつてエルサレムを満たしていた栄光も今は昔となり、さびれた小都市に落ちぶれている。そこで、エルサレムへの愛は悲しみに取って代わったのである。

そのような状況の中で、「彼女と共に喜び樂しみを喜び樂しめ、彼女のために悲しむ者たちすべてよ」と呼びかけている。傍線部は動詞と同じ語根の名詞形を目的語——同族目的語——として用いる用法で、動詞の概念を強調する働きがある。だから、第三イザヤが説く喜びは尋常ではない喜びである。このような喜びがもたらす未来を11節は（直訳）、

彼女の慰めの乳房から乳を飲んで

飽き足りるようにと

吸って、

彼女の栄光の乳首から悦ぶようにと。

と語る（新共同訳は命令法のように訳しているが、その根拠は不明。この節は目的や結果を表す接続詞レマアン（…のようにと）によって導かれているから、10節の呼びかけに従うことによって開かれる未来が語られている）。

第三イザヤによれば、民がいま取るべき態度は「喜ぶ」ことであり、それが未来を開くが、そのように説くことのできる根拠は、12 a節の神の言葉に示されている（直訳）。

主はこう言われた

見よ私は、彼女のほうに向ける

流れのように 平和を

そして大河のように 諸国の栄光を

神は「平和」を「流れのように」、また「諸国の栄光」を「大河のように」エルサレムのほうへと向ける。諸国の輝きがエルサレムへと流れ込むから、エルサレムを愛している者はそれを豊かに享受することができる。

その豊かさを述べるのが、12 b—13節である。子供が母の乳を飲み、母に抱かれ、膝の上であやされるように、民も神からの慰めを豊かに受けることになる。新共同訳が「乳房に養われ」と訳した動詞は、11節で「飲んで」（直訳では「乳を飲む」と訳した動詞と同じである。

第三イザヤが11節で「彼女の慰めの乳房から乳を飲んで飽き足り：吸って、彼女の栄光の乳首から悦ぶ」という未来を説くことができるのは、神が語る約束を聞いて信じているからだ。エルサレムの惨めな現状を見て悲しむ民とは違い、預言者は神が慰めを与える日が到来する

ことを信じているので喜ぶことができる。現状の惨めさの背後から響く神の言葉を聞いているからだ。民と預言者の違いはそこにある。

②「言葉の広がり」

喜び楽しむ(シース)

この語は、馬が谷間で砂をけつて「喜び」勇む(ヨブ三九21)とか、勇士が「喜び勇んで」道を走る(詩一九6)とか、敵が私の受けた仕打ちを「喜ぶ」(哀一12)というような用法もあるが、多くは「神が喜ぶ」とか、「民が神の業を喜ぶ」ことを表す。

神は民の繁栄を「喜び」(申三〇9)、民に恵みを与えることを「喜びとし」(エレ三二41)、ご自分の民を「楽しみとする」(イザ六五19)。

一方、神に従う人は御前に「楽しみ」(詩六八4)、神を尋ね求める人は神によって「喜び祝い」(詩四〇17)、神の定めに従う道を「喜びとし」(詩一一九14)御救いを「喜び楽しむ」(詩三五9)。このようにこの動詞は、神と民の深い交わりの中での、相手に対する喜びを表す。

今日の朗読では、10節と14節に使われており、エルサレムのために喪に服していた者が神の慰めを目にして、「喜び楽しむ」様子が表されている。ちなみに、この動詞は旧約聖書全体で26回使われるが、最も多く用いるのは第三イザヤ(8回)である。

II ガラテヤの信徒への手紙 6章 14―18節

14しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあつてはなりません。この十字架によつて、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。15割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。16このような原理に従つて生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

17これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けています。

18兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

語句の意味

14節■「しかし、このわたしには」。「肉において人からよく思われたがり、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいる者たち」(12―13節)と「わたし」(パウロ)が対比されている。ユダヤ主義者たちが誇るの「肉」、すなわち割礼に代表される律法だが、パウロが誇るの「キリストの十字架」、すなわちキリストそのものである(ロマ五11、1コリ一30―31、フィリ三3)。言い換えればここでの対比は、律法と信仰の対比であり、それはこの手紙の主題でもある。この対比は、この直後に述べられるように、「世」と「わたし」の対比でもある。

15節■「新しく創造される」。それは、古い人から新しい人への転換、すなわち、キリストの内にあつて神の似姿となることである(エフェ二15、四21―24、コロ三9―11)。

16節■「このような原理」。「キリストの十字架」(14節)と「新しく創造されること」(15節)を指している。■「神のイスラエル」。新約聖書ではここだけに見られる表現。これは「肉によるイスラエル」(1コリ十18)と対比された「真のイスラエル、神の民」を意味している。この手紙では、「信仰によって生きる人々」(三7)、「約束による相続人」(三29)、「約束によって生まれた子」(四23)、「霊によって生まれた者」(四29)などと表現されている。

17節■「イエスの焼き印」。これはイエスに仕える奴隷のしるしであり、イエスからの保

護のしるしでもある。

18節■「あなたがたの霊」。「あなたがた」と同じ意味。

Ⅲ福音・ルカ10章1―12・17―20節

1その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。2そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。3行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。4財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。5どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。6平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。7その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。8どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、9その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。10しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。11『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。12言うておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。」

17七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」18イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。19蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。20しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んでほならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

語句の意味

1節■「七十二人」。ルカは「十二人の派遣」を九1―6で述べた後、「七十二人の派遣」をも報告する。写本の中には、「七十二人」ではなく、「七十人」と書くものもある。「十二」はイスラエル部族の数であり、「七十二（または七十）」は伝承として伝えられている異邦民族の数(創10章)。■「先に」。九52にも「先に使いの者を出された」とある。ここでは宿を手配するためであったが、ここではイエスの教えが受け入れられるための土壌の準備であり、宣教のために派遣されている。

2節■「収穫は多いが：」。神の国が宣べ伝えられるべき時期が熟したことを表す比喩的な表現。また、その「実り」は神の国に入ることになっている人々のことを指すと考えることもできる。■「収穫の主に願う」。イエスの働きと弟子たちの宣教は、神の意思のもとに行われる。

3節■「狼の群れに小羊を」。イエスは弟子たちを宣教に遣わす前から、そこに危険が伴うことを知っている。遣わされる者の立場からすれば、それはある意味で慰めにもなりうる。無防備な小羊を守るのは神ご自身である。

4節■「財布も袋も履物も」。十二人の派遣の際に禁じられた物と共通するのは「袋」だけだが(九3)、すべて禁止命令であり、その主旨は一貫している。■「挨拶をするな」。彼らの使命は、挨拶の時間を惜しむほどに、緊急を要する。

6節■「平和の子」。「平和」はただ「戦いがない」といった消極的な状態を表す言葉ではなく、「神の救いの現存」という満ち満ちた祝福を示している。その祝福を受けるにふさわしい者。

①九1―6で「十二人の派遣」を述べたルカは、今日の福音でさらに「七十二人の派遣」を語る。資料的に見れば、ルカは「十二人の派遣」物語についてはマルコ6章の記事を用い、「七十二人の派遣」では「イエスの言葉集(Q資料)」と呼ばれる資料を用いたとされる(マタイは105―15でこの二つを統合し、一つの物語にしている)。ルカが「イエスを証しする者の派遣」を二度も繰り返したのは、全世界への派遣(宣教)というテーマが重要だからであろう。マタイでは宣教活動の対象はユダヤ人に限定されているが(マタイ15)、今日の朗読に登場する七十二人は「すべての町や村」に遣わされる。これは全世界をも視野に入れた表現である。「全世界に広がる、キリストへの信仰」は、ルカが著したもう一つの著作(使徒言行録)にも共通する主題である。「七十二人の派遣」は三つの段階に分けて語られている。それは

「旅路」での態度(2―4節)、

「家」での態度(5―7節)、

「町」での態度(8―9節)

であり、これによって「宣教する者」の姿が具体的に示されている。

彼らは何よりもまず「願う人」でなければならぬ。旅を続けながら、収穫の主である神が働き手を送ってくれるように祈る。「収穫は多いが、働き手が少ない」という現実が待ち構えているからだ。イエスは彼らに「行きなさい」と命じるより前に、「願いなさい」と教える。神の国の宣教は遣わされた者たちによる行為ではなく、むしろその者たちを通して働く神ご自身の活動だからである。

したがって、「行きなさい」は、「わたしはあなたがたを遣わす」という言葉に基づいた指示になる。宣教に向かう者の背後には、イエスと神が控えているが、無力な人間の宣教活動には常に危険が伴う。だから、弟子の派遣は「狼の群れに小羊を送り込む」ことにも等しい行為である。しかし、イエスと神によって派遣されたことを思い起こすなら、慰めと励ましの中で、使命を遂行することになる。

「財布も袋も履物も持って行くな」という指示も、それが神からの派遣であり、神の配慮は宣教する者の必要にまで及ぶからである。神の働きは、彼らが何も持たないことによってますます明確に示される。彼らは道中で交わす挨拶も禁じられている。それほどに緊急を要する派遣だからである。神の国の到来を告げる宣教者は、それを待つ人々の所に着くまでは、ただひたすら道を急がねばならない。

挨拶もせず、まっしぐらに目的地に向かい、家に迎えられたときには、まずは「平和があるように」と告げねばならない。これは礼儀上の形式的な挨拶では終わらない。この「平和」は単に戦争のない状態のことではなく、「満ち満ちた」状態を指す。それは神の救いの到来を示す賜物であり、神が宣教者を通して与える贈り物である。

5節の「家」は宣教者に馴染みのある場所を指すのに対して、8節の「町」は知り合いのない異邦人の土地を表しているかもしれない。そうであれば、神の国の到来は異邦人にも等しく宣言される。宣教者が運ぶ「平和」は人種や国籍や身分や性別とは無関係に与えられるからである。宣教者も清浄規定から自由にされ、どの「町」でもお構いなく、家に泊まり、そこで出されたものを食べることができる。しかも、彼らがその町の病人を癒すとき、「神の国はあなたがたに近づいた」ことが示されたことになる。

ルカの目は、宣教者のすぐれた資質というよりも、彼らと共に働く神に向けられている。宣教者とは身をもって神の働きを示す人だからである。

②言葉の広がり

いやす(セラペウオー)

この語のギリシア語本来の意味は「仕える」ことを表し、そこから「医者として仕える」病気を治す」の意味で使われた。新約聖書でも、使一七25「(真の神は)人の手によって仕えて

もらう必要ありません」のように「仕える」の意味でも使われるが、用例はこの一例にかぎられている。

その他の用例では、もっぱら「病気を治す・いやす」の意味である。イエスが中風（マタ八七）、長血の患い（ルカ八43）、水腫（ルカ一四3）を「いやし」、なえた手（マコ三2）、目の見えない人や足の不自由な人（マタ二14）、腰の曲がった人（ルカ一三14）を「いやす」のは、神の国の到来を示すしるしだからである（マタ四23）。そこで、弟子たちを派遣する際にも、病人を「いやす」権能を授ける（マタ十一8）。こうして、使徒たちもイエス・キリストの名によって病人を「いやす」ことになる（使四14）。

今日の朗読でも、「神の国が近づいた」ことを示すために、使徒たちも病人を「いやす」とになる。

IV 今日の朗読から

慰めの乳房から飲んで、飽き足り（第一朗読）

預言者と我々との違いは、我々には惨めさとしか見ない状況にあっても、「慰めの乳房から飲んで、飽き足り」と語れることにあるといえます。

根っからの楽道家だからではありません。我々が物事の表面しか見ていないときにも、その背後にあつて呼びかける声に耳を澄ますことができるからです。第三イザヤが活動した時代は、決して明るい希望に満ちていたのではなく、むしろ先行きの見えない、暗い時代でした。栄光は消え去り、不安が人々をおおっていました。それでも第三イザヤが喜び樂しめと説くことができたのは、「見よ、わたしは彼女に向けよう、平和を大河のように」と語りかける神の言葉を聞く耳を持っていたからです。

世に対してはりつけにされ（第二朗読）

パウロも預言者と同じように、鋭い視力に恵まれていた人です。ですから、十字架についての見方も「世」とは異なつたものとなります。世は律法を自分の力で守ることによって救いを獲得しようとする努力を重ねますが、十字架に神の救いを見たパウロにとって、そのような生き方こそはりつけにされるべき生き方です。

しかし、十字架を「つまずき」と断じたり、「愚かなもの」と評価したりする世の人から見れば、パウロこそ惨めだと見なされます。彼はまさに「世に対してはりつけにされた」者なのです。十字架の背後に神の救いを見るパウロは、「このわたしには、……十字架のほかに、誇るものが決してあつてはなりません」と述べ、世との対峙をはっきりと宣言します。

「神の国は近づいた」と言いなさい（福音）

第三イザヤは悲惨な現状の背後に、またパウロは世から見れば愚かさにはすぎない十字架の背後に、神の呼びかけを聞き取りました。それは彼らの勝利というよりも、神の勝利宣言でした。

神の国とは、神の支配そのものであり、その支配の及ぶ領域全体をさしています。ですから、第三イザヤもパウロも「神の国は近づいた」と宣言していたこととなります。

我々は確かに彼らのような耳や目に恵まれてはいません。それでも、「神の国は近づいた」と宣言しなければならぬのですから、宣言をめぐって、我々の間に食い違いが起こっても不思議なことではありません。

大事なのは神の勝利であつて、宣教者の勝利ではありません。